

新たな日本の美「ジャパニーズ・モダン」の創造

—尾道浄土寺・露滴庵—

三 梶 正 典*

(2016年11月24日 受理)

Fusion of Traditional Culture in Japan and the Modern Art

— ONOMICHI Jhodotemple・Rotekiann —

Masanori MIMASU*

This paper introduces the production process on the theme of “Fusion of Japanese Traditional Culture and its Modern Art,” in which the author has been engaged. New paintings on “fusuma” or traditional Japanese sliding doors were produced and exhibited in November 2016 for the study of tea-ceremony room “Rotekian (important cultural property)” of ONOMICHI Jhodo temple and tea-ceremony room “Myokian” in the garden of ONOMICHI Souralikenn. This paper aims at the creation of a new “beauty of Japan” through this production.

Keywords: Modern Art of Japanese ジャパニーズ・モダン, Fusuma paintinging 襖絵, ONOMICHI Jhodo temple 浄土寺, Rotekiann 露滴庵

はじめに

聖徳太子開創と伝えられる尾道市の国宝の寺「浄土寺」は、2016年、開創1400年の大きな節目を迎えた。合わせて平成の大修理記念行事として秘仏御本尊十二面観世音菩薩御開帳法要、結縁灌頂、尾道源氏絵茶会、奉納和太鼓など多くの行事が開催された。浄土寺は、鎌倉時代から江戸時代にかけて建てられた国宝の本堂・多宝堂、重要文化財の阿弥陀堂、方丈など我が国の寺院建築を代表する建物が境内に立ち並んでいる。その境内庭園の小高い丘の上に日本の美意識を継承する世界に誇れる茶室がある。それが重要文化財の「露滴庵」。その「露滴庵」の襖絵を開創1400年記念行事の関連企画として担当させて頂く機会を得、新作襖絵を展示させていただいた。モチーフとして選んだのは、浄土寺と歴史的関わりのある「源氏物語」と現存最古の燕庵の写しである茶室の関わりである「古田織部」。

本論文では、「日本の伝統文化と現代アートの融合」のテーマに沿って現在まで継続して筆者が制作している表現活動の経緯を紹介しながら、新作襖絵の作品と制作過

程を通し表現の不思議さや面白さの一端に触れ、新たな日本の美「ジャパニーズ・モダン」の創造を目指したものである¹⁾。

ジャパニーズ・モダン

2016年1月、ひろしま美術館企画展「浮世絵忠臣蔵と新春を彩る日本画－日本美術に見る技と美－」の関連企画として三梶正典展「ジャパニーズ・モダン 江戸から現代へ」展を開催させていただいた。このタイトルは、前年京都のギャラリー白川の新シリーズ企画展に第1回作家として開催させていただいたタイトルをそのまま引き継ぎ使用したもので、展覧会で示した「ジャパニーズ・モダン」の定義は、日本の伝統的なデザイン・素材・技術を用いて再構成された現代美術。その新シリーズ企画展パンフレットの冒頭には以下のように述べられている。

現代において「日本の美」を追求していくと、「日本の美」が生き生きと目に映える時代があります。「江戸時代」です。鎖国の中で豊かに「日本の美」が成熟したこの時代に視点を戻し、江戸時代に花開いた「日本の美」を現代へと繋いでいくことが新たな「日本の美」

* 広島女学院大学 人間生活学部幼児教育心理学科 教授

への創造へと繋がっていくのではないか²⁾。

一般的に「ジャパニーズ・モダン」という語は、建築・工芸の分野で使われている用語で「和モダン」と言われるケースが多く、和の風味や様式をモダンデザインの設計なかに取り込んだ和洋折衷様式の意味を持っている。しかし、本論文ではギャラリー白川の定義に沿って伝統的な日本のデザインや・素材・技法を現代表現で再構成させる意味で展開している。

露滴庵

「露滴庵」は、京都の堀川屋敷にあった茶室を写したもので、京都・本願寺を経て尾道向島で製塩業を営んでいた富商天満屋の庭園に移築され、その後浄土寺に寄進・移築したものとされている。茶室は三畳台目に相伴席、水屋、四畳と四畳半の勝手が附属する燕庵様式である。燕庵は、古田織部と親交のあった藪内剣仲が建てた茶室であるが、元治元年（1864年）に焼失したため、「露

滴庵」が織部好みの茶室としては現存最古のものであり、国の重要文化財に指定されている。尾道市が制作している「露滴庵」を紹介するパンフレットには、日本人の美意識や文化の捉え方を「露滴庵」に重ね、以下のように述べている。

浄土寺小林海暢長老は茶室が佇む場所をさして“露が滴る場所にある庵”と説かれています。夜露が芽に優しく降り注ぎ、やがてその露が朝日を受け、光をたっぷりと含み一滴の滴となり地面に優しく落ちるが如く… 日本人の心の中の美意識を利休の『侘び・寂び』を変化させた古田織部の美意識を語り継いできた茶室とともに、『綺麗さび』を説いた小堀遠州直筆の掛け軸が伝えられています。（中略）利休亡き後、古田織部と小堀遠州によって形が確定されていった茶の文化は、日本の美意識そのもののものです³⁾。

この露滴庵では、四畳半（9枚）と四畳（4枚）の勝

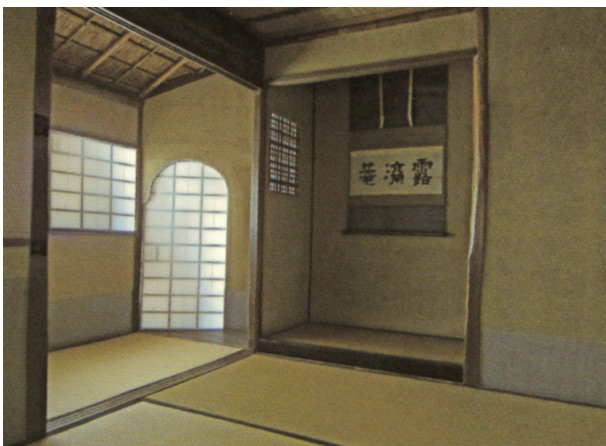


図1 露滴庵三畳台目（掛軸小堀遠州筆）⁴⁾



図2 露滴庵外景

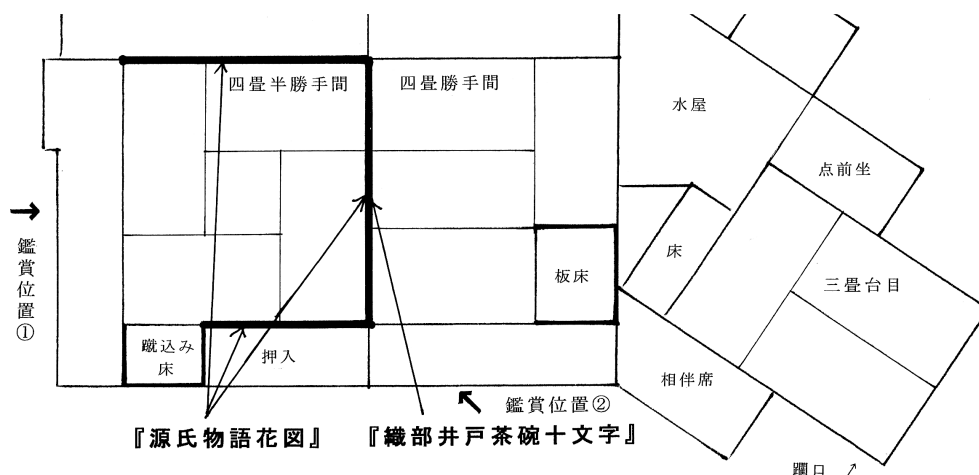


図3 露滴庵平面図（部分）

手間の2つの空間2点の襖絵を手掛けた。1点は、浄土寺の1400年の歴史の中から関わりのある「源氏物語」をテーマに『源氏物語花図』を制作、もう1点は露滴庵が古田織部好みの茶室様式であるということから「古田織部」をテーマに『織部井戸茶碗十文字』を制作した。アクリル絵の具を使い、江戸時代後期御洒落で自由闊達に描かれた琳派の世界に使われた技巧の表現の一つであるモチーフの「引用」と「再構成」の方法を用いて「日本の伝統文化と現代アートの融合」の表現を試みた。

モチーフの「引用」と「再構成」

斬新な美の造形を京都の地に展開させた「琳派」その



図4 舞楽図屏風 日光山輪王寺所蔵

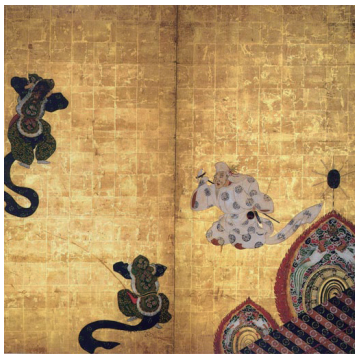


図5 舞楽図屏風（部分） 俵屋宗達作

最も中心の絵師の一人が「風神雷神図」「松島図」などの名品を描いた俵屋宗達。その宗達が最も得意とした技法の一つが「引用」と「再構成」である。彼は、室町時代にもはやされた和歌を描く扇面の職人家に生まれ育った経緯もあり、その技法を使って多くの「扇面散図屏風」も残している。中でも代表的な作品が宗達晩年の傑作と言われる「舞楽図屏風」。日光山輪王寺所蔵の「舞楽図屏風（作者不明）」の舞楽をモチーフに登場人物を「再構成」し、独自の世界観を作り上げている。

源氏物語花図

浄土寺に奉納されている「源氏物語絵扇面張屏風」。室町時代の後期土佐派の絵師による作と伝えられるこの作品は、徳川家の源氏絵巻、橋本本源氏物語に続く日本の宝であり、源氏物語の享受のありかたを示す貴重な文化財である。古来より人々のよりどころとなった「観音のお寺」浄土寺、室町將軍足利尊氏が戦勝祈願に訪れた浄土寺、源氏物語の作者紫式部没後「観音の化身」と言われたことなどの事柄を重ねると、屏風と浄土寺の深い繋がりを感じる。屏風は、「源氏物語」54帖中40帖の場面が描かれた60面の扇面が、物語の順番でなく春夏秋冬の季節ごとに、また扇面も実際に使われていたものを後から骨を外し「再構成」されている。露滴庵の四畳半勝手間の9枚の襖絵は、古来より浄土寺との深い繋がりのある「源氏物語」をテーマとし、全国の植物を実際に歩き調べてまとめた植物学者牧野富太郎の『牧野新日本植物図鑑』と「源氏物語」の登場人物や和歌に詠まれた場面を花に置き換えた紀行作家青木登の『源氏物語の花』のモチーフを引用し、54の草花を54帖の物語順に再構成し描いた。源氏絵の多くは、金地をベースに華やかな彩りで描かれているが、作品は、茶室空間に合わせ、花々に彩り



図6 浄土寺 露滴庵 源氏物語花図 四畳半勝手間

52	49	46	43	40	37	34	31	28	25	22	19	16	13	10	7	4	1
53	50	47	44	41	38	35	32	29	26	23	20	17	14	11	8	5	2
54	51	48	45	42	39	36	33	30	27	24	21	18	15	12	9	6	3

図7 花図表

1 キリ 2 フジ 3 ナデシコ 4 ユウガオ 5 ムラサキ 6 ベニバナ 7 ウメ 8 カエデ 9 ヤマザクラ
 10 フタバアオイ 11 ノコンギク 12 カラタチバナ 13 ノキシノブ 14 アカマツ 15 チガヤ 16 アサガオ
 17 ヤマブキ 18 ヤマツツジ 19 ウツギ 20 ボタン 21 クスギ 22 サネカズラ 23 クチナシ 24 センダン
 25 ハナショウブ 26 ハマヒルガオ 27 セキチク 28 タカネナデシコ 29 マユミ 30 ミヤギノハギ 31 シオン
 32 オミナエシ 33 ホオズキ 34 リンドウ 35 フジバカマ 36 ミヤオザサ 37 スズシロ 38 ホトケノザ 39 ハマユウ
 40 カシワ 41 オニドコロ 42 ヤマイモノムカゴ 43 ハス 44 クズ 45 ワレモコウ 46 シキミ 47 ツユクサ
 48 ワラビ 49 ツクシ 50 ツタ 51 ヤブコウジ 52 アシ 53 キキョウ 54 ワスレグサ

図8 花名（1～54）

を施さず、茶の色（青緑）で揃えながらも茶室に差し込む日の光に輝く金を施しながら、物語のもつ優雅と清楚を表現してみた。

織部井戸茶碗十文字

浄土寺露滴庵は、前述しているように古田織部好みの燕庵形式の古い風格をもつ建物である。古田織部は、戦国時代から江戸時代初期にかけての武将で、千利休の弟子として一般的に武将茶人として知られる。千利休が大



図9 襖絵「織部井戸茶碗十文字」四畳勝手間

成させた茶道を継承しつつ「へうげもの」と称される大胆かつ自由な気風を好み、茶道具・建築様式・造園などにわたって「織部好み」と呼ばれる一大流行を安土桃山時代にもたらした。今回露滴庵の襖絵を手掛ける祭、小林住職から「織部好み」の茶室でもあるので「大胆な表現を試みてみては」との提案もあり、四畳勝手間の襖4枚には「織部」をテーマに織部の茶道具に関わる逸話をモチーフとして『織部井戸茶碗十文字』を制作した。井戸茶碗十文字は、「大井戸」とよばれた茶碗としては巨大な井戸茶碗を「いかにして小さくするか」と、常人だったら高価な茶碗に恐れ多くてそんなことはできないが、織部はその茶碗を大胆にも十字に裁断してしまい、少し一部をそぎ落ちしたうえで再び漆でつなぎ合わせることで、「十文字」を完成させたという逸話。不完全さを肯定する美意識。これは自然体を生かす千利休の美意識とは全く対極。その「井戸茶碗十文字」を真上から見た様を7枚の襖絵に宇宙の星のイメージと重ね描いた。また2つの床（蹴込み床・板床）には、織部が茶器の絵付けに用いたデザインをモチーフにしたオブジェを作成し、斬新な床空間演出を試みた。

織部と利休

尾道市には日本で数例しか許されなかった写しの茶室が2つある。1つは、古田織部好みの現存最古の燕庵写しの浄土寺「露滴庵」。もう一つは、日本の茶の湯文化を象徴する千利休作国宝山崎明妙庵待庵の写しの爽籟軒「明喜庵」である。その歴史的に貴重な茶室が僅か数メートルの範囲に移築されている。織部は、利休の弟子七哲の一人であるが、織部は千利休の「人と違うことをせよ」

という教えを忠実に実行し、利休の静謐さと対照的な動的で破調の美を確立させ、それを一つの流派に育て上げた。対照的な美意識をもつ「利休と織部」。妙喜庵では、3年前に襖絵を展開させていただいた流れもあり、今回の露滴庵での襖絵制作を機に、「露滴庵」と「妙喜庵」を舞台に「利休と織部」というテーマでも襖絵を制作させていただいた。選んだモチーフは、露滴庵「源氏物語花図」で用いた「牧野新日本植物図鑑」と利休の美意識にまつわる「逸話」。妙喜庵の襖絵も露滴庵と同様に「引用」と「再構成」の手法を用い、2つの作品「朝顔（襖絵2枚）」「梅一枝（襖絵3枚）」を制作し、利休の美意識の表現を試みた。また妙喜庵にある2つの床にも「利休形」と題したオブジェを制作し、床空間演出を行った。

1. 「朝顔」

朝顔は、利休屋敷の庭に満開の朝顔が咲いていると聞いた秀吉が駆けつけたところ、朝顔は一輪も咲いて居らず、残念に蹴口を開けて茶室に入ってみると、床に一輪の朝顔が生けてあり、それを見た秀吉は、庭一面に咲いている朝顔とは違う独特の美しさに深く感動したという逸話。一輪の白い朝顔を2枚の襖に大きく描き、利休が表現しようとした「朝顔」の美意識に迫ってみた。

2. 「梅一枝」

梅一枝は、秀吉が水のいっぱい入った大きな金色の鉢を用意させ、その傍らに紅梅一枝を置き、利休に「床に置いてある大鉢に、この紅梅を生けてみせよ」と命じた。利休は紅梅をしごきとって水面に散

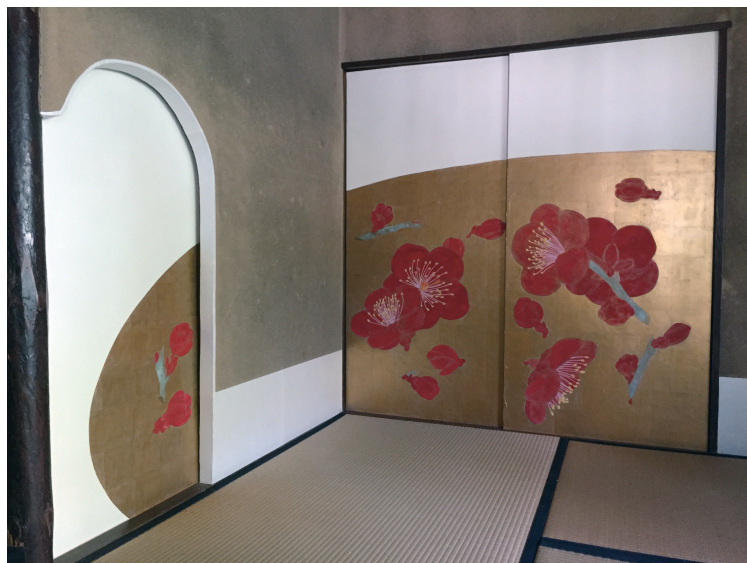


図10 明喜庵 襖絵「梅一枝」



図11 明喜庵 襖絵「朝顔」 床の間 オブジェ「利休形」

らした。紅梅の花びらや蕾が水面に浮かんで、金色の鉢に映えている様を見た秀吉は、あまりの美しさに声をあげて驚いたという逸話。襖全体を金色の鉢に見立て、一枝の梅が水面で咲き散る様を描いた。

「朝顔」「梅一枝」の花の図像は何れも露滴庵の「源氏物語花図」で用いたモチーフを引用し、利休が摘んだように朝顔を摘み、切りしごいたように梅を切り刻み、それぞれ襖空間に再構成して新しい美意識の表現を試みた。

まとめ

制作テーマとしている「日本の伝統文化と現代アートの融合」は、2013年に尾道の爽籟軒・明喜庵の襖絵制作を進めていく過程で、現在尾道市立美術館学芸員の梅林信二さんから制作論の指針として示していただいたものである。その尾道で2016年、再び新作の襖絵を制作する機会を得た。その空間は、国宝のお寺「浄土寺」。古の人々が触れたであろう空間を、時を経て共有する深さを改めて実感しながら約2年間、制作を行って来た。そして浄土寺の小林海暢長老、小林暢善住職をはじめお寺や市役所の方々など多くの人のお陰で作品制作～公開へと実現することができた。今回の襖絵制作で最も注目したのが国宝の寺として仏の教えを守り続け、1400年の歴史を刻んだ空間との繋がり。「引用」と「再構成」。それらは、言葉に出来ないくらい深い、そして重圧にも感じる感覚であった。そして数多くの失敗や試行錯誤を繰り返すなかでほんの僅かに気づく気づきをたどって出会った表現方法がいくつもあった。それが最も顕著に表現されたのが明喜庵の襖絵「梅一枝」。牧野富太郎の植物図鑑から引用した梅を「源氏物語花図」に引用し、画面上で再

構成、さらに「梅一枝」で再構成した梅を引用し、再構成していく過程。その中から何かしらの「新しい美」の創造を試みることができた感じがした。襖絵の一般公開は、4日間の限定であったが、公開期間中全国から多くの人に見に来ていただき、1400年の歴史と「新しい美」との出会いの時をそれぞれの持つ美意識と重ね、鑑賞していただいた。露滴庵を紹介するパンフレットの最後には、日本人の心の中の美意識の一つである「詫び・寂び」を茶室とともに以下のように述べている。

「わび」という言葉の根元には「思い通りにならないつらさ」があり、「さび」という言葉は「生命力が衰えていくさま」という意味があり否定的感情をあらわす言葉です。こうした否定的な感情をあらわす言葉が逆



図12 床の間のオブジェ



図13 小学生を前にギャラリートーク



図14 茶室に向かう回廊からの襖絵「源氏物語花園」

山陽日日新聞

2016年11月3日(木曜日)

広島市在住の芸術家で、広島女学院大学教授の三樹正典さんの新作襖絵が市内の代表する2つの茶室で11月3日から公開される。

利休と織部をテーマにした襖絵で、現代アートと歴史的な茶室で独特な空間表現をする。

古田織部が作事した燕庵の写し、浄土寺の露滴庵では、浄土寺開創1400年を記念して「源氏物語花園」を展示する。先日の源氏絵茶会もひらかれた源氏物語ゆかりのお寺にふさわしく、源氏物語をテーマにした源氏物語に登場する花々を9枚の襖に54輪描いている。

会期は6日までの午前10時から午後4時、拝観料として十一面観世音菩薩特別公開御開帳の秘仏内拝志納料を収めた方を対象とする。

もう一点は千利休の妙喜庵待庵の写し、爽籟軒茶室・明喜庵に千利休をイメージした朝顔と梅をテーマに表現した襖絵とオブジェを展示する。会期は3日、5日、6日の午前10時から午後4時、拝観料は大人100円、中学生以下無料。

写真は浄土寺の露滴庵にて。

織部と利休をテーマに
2つの茶室で襖絵を公開
広島女学院大学教授 三樹正典さん

図15 山陽日日新聞 2016. 11. 3⁶⁾

に「美を表す用語」として茶の湯の世界や俳諧などの文芸の世界で通用するところに、日本人独自の美意識や文化のとらえ方があるといえるでしょう。浄土寺『露滴庵』には、数百年の時を越え、その形が静かにあるのです⁵⁾。

今回の制作では、始めて床の間に掛軸とは異なるオブジェを取り付けた。織部が作る茶器に繰り返し登場する文様を引用し、銅版を切り抜いたものであるが、不思議にその形が静かに間に入り込んでいた。自分にとっても新鮮な表現を感じた。今後は、伝統的なデザインや手法だけでなく素材そのものにも着目し、再構成する中で新たな日本の美「ジャパニーズ・モダン」を展開していけたらと考える。

引用文献

- 1) 三樹正典『日本の伝統文化と現代アートの融合』三晃書房, 2016, p. 3

- 2) 池田真知子『ジャパニーズ・モダン 江戸から現代へ』ギャラリー白川, 2015, p. 2
- 3) 村上宏治『知るを楽しむ尾道美の回廊 Vol 3 国宝の寺 尾道浄土寺・茶室露滴庵』尾道ユネスコ協会, 2010, p. 1
- 4) 図1 宮下玄覇『古田織部の世界』宮帯出版社, 2014, p. 25
- 5) 上掲書 3) p. 1
- 6) 図15 山陽日日新聞 2016年11月3日(木) p. 2

参考文献

- 三樹正典『日本の伝統文化と現代アートの融合』三晃書房, 2016
- 浜田宣『国宝の寺 尾道 浄土寺』浄土寺, 2001
- 宮下玄覇『古田織部の世界』宮帯出版社, 2014
- 五十嵐佳世『和楽ムック「琳派」最速入門』小学館, 2015
- 折橋俊英『日本美術館』小学館, 1997
- 神津朝夫『千利休の「わび」とはなにか』角川選書, 2005
- 村上宏治『知るを楽しむ尾道美の回廊 爽籟軒庭園「明喜庵」』尾道ユネスコ協会, 2009